カブの生長段階による農薬吸収特性の解明

【背景と目的】

カブは小カブから大カブまで出荷サイズに幅があるが、いずれもカブに登録のある農薬を散布できるため、収穫物の大きさによって残留挙動が異なることが懸念される。そこで、随時どりできる品種「スワン」で小カブと中大カブとを比較し、農薬残留性を明らかにする。

【研究概要】各農薬を施用基準の最大量散布し、最終散布後１、３、７日後に部位別の残留濃度を計測し、安全性を検証した。

（１）ジノテフラン：葉の残留濃度は、春作小カブでは中大カブより多く残留したが、ともに基準値（６ppm）以下であった。秋作は、春作に比べ高濃度であったが、基準値以下であり、サイズによる差異はなかった。根の残留濃度は、サイズに関わらず基準値（0.5ppm）を大きく下回った。

（２）シアゾファミド：春作における葉の残留濃度は、小カブ、中大カブとも基準値（20ppm）と比べ十分に低い数値であった。春作における最終散布後の根の残留濃度は、小カブ、中大カブともに７日後には定量限界未満となった。秋作の根の残留濃度は、サイズに関わらず基準値（0.3ppm）と比べ十分に低い数値であった。

（３）フルベンジアミド：葉の残留濃度は、小カブより中大カブの方が高かったが、ともに基準値（25ppm）以下であった。根の残留濃度は、収穫物の大きさに関わらず基準値（0.3ppm）を大きく下回った。

（４）以上の結果から、施設圃場で栽培されたカブに対し、カブに登録のある上記３成分の農薬は登録使用基準に則して施用し、定められた日数を経過すると、収穫物の大きさおよび栽培時期にかかわらず葉や根の残留濃度は残留基準値を超過しないことが明らかとなった。